

# 英語による海外旅行提案コンテスト「Top Holiday Destinations」

大阪府立東百舌鳥高等学校 教諭 稲川 孝司

大阪府立東百舌鳥高等学校 教諭 橋本 昌代

キーワード：iPad, Keynote, プレゼンテーション, 英語教育, コミュニケーション

## 1. はじめに

最近、教育現場でコミュニケーション力の重視が話題に上がっている。文部科学省が平成 17 年に公表した「読解力向上に関する指導資料」では、PISA 型読解力向上のための具体的な方法として「様々な文章や資料を読む機会や自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること」と書かれている。また、平成 18 年に経済産業省が提案した「社会人基礎力」の中のチームで働く力として、発信力・傾聴力の重要性が繰り返し訴えられている。英語教育においても、口語による英語コミュニケーション能力育成の重要性が叫ばれており、高等学校学習指導要領の改訂の趣旨の中で言語活動の充実とともにその重要性が述べられている。

そこで、英語によるコミュニケーション力の向上をめざして入学から卒業までの3年間の計画を立てて授業を実践した。1年次には英語劇を学年全体で取り組み優秀なグループは体育館で演じ、2年次には全員が英語でプレゼンテーションを行った。

ここでは、3年次にコミュニケーション力の更なる向上をめざして、ICTを活用して協働学習をしながら旅行代理店店員に扮して夏休みお勧め海外旅行を提案するコンテストに取り組んだ内容を報告する。

## 2. 授業のねらいと目標

1年の英語劇「ももたろう」では既成の英文を暗記しみんなの前で発表すること、2年のプレゼンテーション「My Trip」では定型表現を一部アレンジした原稿を暗記しパソコンを補助的に使って自分自身を表現すること、3年の「Top Holiday Destinations」では、それまでの定型表現の丸暗記から一歩前進し、英語で自由に表現することの楽しさとより効果的なプレゼンテーションの方法を学ぶことをねらいにした。その際、大阪府教育委員会の「校長マネジメント推進事業中期計画」でスマートインフィルとプロジェクトを設置したフューチャークラスルームに会議室を改造し、「English Frontier High School」の予算で購入したiPadとプレゼン用ソフトのKeyNoteを活用した授業を実践した。授業では次の4つの目標を設定した。

### (1) 発表力・表現力の向上

これまでの発表と比べ、発表内容の自由度を増すことでより魅力的で説得力のある発表と、実社会でも通用するプレゼンテーション能力育成をめざした。

### (2) 4技能（読む・書く・聞く・話す）の向上

取り組みの過程で、4技能をバランス良く伸ばさせることが出来るよう授業を組み立てた。

### (3) 国際的視野を広げる

トピックを「海外旅行提案」とすることで、生徒が

広く諸外国の文化や歴史に目を向けるよう配慮した。

### (4) 協働学習力の育成

グループ優勝という共通の目標に向かって、グループ内で協力しながら学ぶ姿勢が育つよう配慮した。

## 3. 授業について

### 3. 1 全体の授業の流れ

外国の都市名・国名・位置が一致しない生徒が多いため、世界の国名と首都名を地図上で確認後、カルタゲームでそれらを覚える地理の学習から始めた。また、発表で用いる表現や発表形式を体得させるため、教員による「Let's go to Hawaii」のプレゼンテーション例を聞かせて、内容把握のための英問英答・ディクテーション・ピクチャー並べ替えゲーム等を実施し、読解力・リスニング力の強化を図った。また、プレゼンテーションを暗唱させ、発音練習、iPadを利用した録音、ならびに暗誦発表会を実施した。

そして、旅行代理店社員として各自が興味ある外国についてiPadで情報を収集し、お勧めする国（都市）とお勧めのポイント3つを決めた。その後、各自で日本語による発表内容を作成し、そこから英語による発表原稿を作成し、ALTによる英語原稿のチェックと発音指導を行った。次にiPadを用いてスクリプトを定期的に録音し発音の上達状況をチェックした。KeyNoteによるプレゼンテーション用のスライドはiPadの可搬性を生かしてグループ内で互いに教えあひながら作成した。

### 3. 2 発表当日の授業の流れ

生徒は4つの旅行代理店のグループに分かれ、その社員として一人3分以内でiPadの画像や文字を使い、英語を駆使して夏の海外旅行を提案する。生徒は、個人としての最優秀プレゼンターをめざすとともに、グループとして最優秀代理店の座をめざして競い合う。そして評価の高い生徒が選ばれ、全体に対しプレゼンテーションを行う、という授業である。

#### (1) iPadを用いて発表原稿の最終録音（5分）

学習履歴や発音の上達状況のチェックを授業中以外で行うために、iPadの録音機能を使って一人ずつが英語の発音を定期的に録音・録音した。



写真1 発表原稿を録音中の生徒

## (2) ペアワーク (15分)

ペアワークは相互評価により仮想代金(以後、東百舌鳥\$)をできるだけ多く獲得しようと競い合う活動である。他のグループのメンバーとペアになり、ジャンケンをする。勝った方が iPad を操作しながらプレゼンテーションをして、負けた方は発表を聞きながらプレゼンテーションの内容をワークシートに書き取る。発表後、聞いた人はプレゼンテーションの内容の良さに応じて、2\$または1\$を発表者に渡す(制限時間の3分以内にプレゼンテーションが終わらなければ何も渡さない)。発表者は、プレゼンテーションの内容を正しく書きとれていた場合1\$を、正しく聞き取れていない場合は0\$を聞いた者に渡す。



写真2 ペアワークでのプレゼンテーション

## (3) グループワーク (13分)

旅行代理店毎にグループを作り、グループの代表者を決めるために、グループ内で順に iPad を操作しながらプレゼンテーションをする。残りの者は評価シートに記入。全員の発表終了後、評価シートに基づきグループの代表者を決定する。



写真3 グループでの発表

## (4) コンテスト (15分)

選ばれた各代理店の代表者は、教室前部の発表席に移動して、iPadを手元で操作し、AppleTVの無線機能を使ってスクリーンに資料を映して発表する。残りの者は発表を聞き、最も良かったと思う発表者にiPad上で投票する。代表者が1票獲得する毎に各旅行代理店は1\$獲得する。



写真4 最優秀生徒による発表

## (5) 表彰 (2分)

ペアワークで獲得した額と合計して最も多額の東百舌鳥\$を獲得した代理店が最優秀代理店となり、表彰される。さらに、最も多く得票した生徒は最優秀プレゼンターとして表彰される。

## 4. まとめ

教え合いながら「Top Holiday Destinations」の作品を作り、一連の流れを持った活動として、必要な情報の主体的な収集・判断・表現、処理・創造ができた。ペアワークやグループワークでは ICT を活用して英語で話し合いをして、最後に発表するという授業を行った。iPadの可搬性を生かして情報の収集を行い、プレゼンテーションツールの KeyNote を使って資料提示をして双方向のプレゼンテーションができた。

一方向のプレゼンテーションはコミュニケーションではない。双方向になってはじめてコミュニケーションが成立するのである。コミュニケーションを「対話」「交流」「討論」「説得・納得」の4つの段階から考える21世紀型コミュニケーションの立場<sup>(1)</sup>からも、協働的な学びを通してコミュニケーションの段階を徐々に高めることができた。

3分間の自由な「旅行の提案」プレゼンテーションに対し、当初は不安を抱えていたが取り組み後の自己評価は高く、多くの生徒は英語力が飛躍的に向上したことを実感していることがアンケートから分かった。

### (1) 発表力・表現力の向上

自分が言いたいことを自分の英語で発表することで、心のこもった発表となった。「この表現は、ドリルで100回練習しても覚えなかったと思う」と言いながら現在完了構文を駆使した英文で発表した生徒もいた。iPadとKeyNoteのプレゼンテーション機能を用いることで、実際にビジネスの場で行われているような英語でのプレゼンができた。

### (2) 技能(読む・書く・聞く・話す)の向上

インターネットを利用して、紹介する国について英語で書かれた資料を読むことで、初見の英文から必要な情報を読み取る力が養われた。紹介したい内容を、ALTの助けを得ながら英語にすることで、意欲的に英文文に取り組みした。教員や他の生徒が発表する内容を聞いてワークシートに記す作業を通して、ポイントを聞きとる力がついた。発音練習毎にiPadに録音することで、発音の上達を自分で確認出来、生徒達は自信がいった。

### (3) 国際的視野を広げる

「お勧めの海外旅行を提案する」ために広く海外に目を向けその国の魅力について調べてまとめることで、日本とは異なる文化・歴史・自然についての理解が深まった。

### (4) 協働学習力の育成

グループ毎にまとまって着席し、iPadの使い方から発表内容に至るまで、互いに相談し、教え合いながら学習を進めた。特に、グループ優勝を勝ち取るという共通目標に向かって、互いに評価し問題点を改善することで、グループ構成員全員の発表力が向上した。

### 【参考文献】

(1)中川一史ら、続コミュニケーション力指導の手引き、高陵社書店、2012